

73

Lorenz Böhler の外傷外科医としての生涯

大幸 俊三

春日部市立医療センター 整形外科／竹の塚脳神経リハビリテーション病院

昨年 Wien に出かけ、Lorenz Böhler について知る機会を得たので報告する。

Lorenz Böhler は1885年1月15日オーストリアの西にある Wolfurt で生まれ、職人の息子として育った。1905年 Wien 大学医学部に入り、1909年軍部で学び、1911年には一般医師となった。Theodor Billroth (1829–1894) により有名になった Wien 大学の第二外科の Julius Hochenegg (1859–1940) に学び、船医として10ヶ月勤め、帰国後の1912年イタリア(当時はオーストリア)の Bozen 病院に勤務した。

1914年4月にアメリカ New York で開催された International Surgical Congress に出席し、ベルギーの Albin Lambotte (1866–1955) に会い助言を受け、Mayo Clinic (Rochester) など1ヶ月ほど滞在したが、1914年7月から第一次世界大戦が始まり帰国した。1915年にイタリア戦線への展開となり、連隊公式医師として勤務し、翌年に Gunshot 骨折と関節損傷の特別部門を主導することになった。しかし、1918年にイタリアで戦争捕虜となったが、イタリアの顧問医師として勤務した。同年11月に戦争が終結し、その翌年帰国し、イタリアの Bozen で開業したが、まもなく、1919年から1920年にかけて Wien 大学第二外科の Julius Hochenegg と整形外科の Adolf Lorenz (1854–1946) に指導を受けている。

1925年に Wien で最初の救急病院 (Unfallkrankenhaus) のメディカルディレクターに任命され、1930年に Wien 大学で外科博士資格を得て、1936年に助教授となり、その間、その後も外傷外科を一筋に学びながら、彼独特の考えから現代のリハビリテーションを見据え、その以前とは大きく改善する結果が評判を呼び、欧米から多くの医師が見学に訪れたと言われている。彼は同一の外傷疾患を一病棟に入院させ、合理的な治療法を行った。また、戦争による負傷で大腿骨骨折が多く見られたが、それまでただ安静臥位にしていた治療からギブス固定後に比較的早期の運動療法として立位訓練、歩行訓練をさせるといった驚異的な加療を行い、骨癒合率が9%から50–70%にと飛躍的に改善した。脊椎骨折ではギブス固定し安静にしていると筋力低下が著明となるため、ギブス固定後から背筋の筋力強化を行い、ギブス除去後も機能回復を早めることができた。1956年に教授になるが、大学には戻らなかった。

我が国では彼の名前のついた Böhler cast は脊椎骨折に対して腹臥位として、整復のために伸展位としてギブス固定する方法である。これは時に腸管の麻痺が発生し、稀に死に至ることから、現在では無理な整復は行われていない。また、彼は踵骨骨折で踵骨の後方が挙上を来し angle が減少し、これを Böhler angle と名付けて1931年の Journal of Bone and Joint Surgery に報告しているが、我が国の教科書でも書かれ、整形外科医であれば誰もが知る名前である。

Böhler の外科手術としては、1867年に Joseph Lister (1827–1912) による消毒、殺菌法が取り入れ、骨折に金属による創外固定や内固定が徐々に用いられたが、金属は酸化が起り、感染が頻発した。徐々に stainless steel に変わり、1925年 Marius Smith-Petersen (1886–1953) による大腿骨頸部骨折に三翼釘が開発され、Böhler らは三翼釘の中に穴を開け、wire を先に入れて X 線で確認して挿入する方法がとられた。さらに、同年に Harrison McLaughlin (1906–1970) による nail と plate を組み合わせ、Böhler も同様の hip plate を作成し大きく進歩している。また、これをヒントに Gerhard Küntscher (1900–1972) が1939年に開発した Küntscher の髓内釘を Böhler も積極的に用いるようになり、外科手術の発展に寄与した。1963年に退官したが、その後も彼は外傷病院に毎日のように行き、外傷学に生涯を捧げ、1973年1月20日にその外傷病院で亡くなった。